

## K. ウィットフォーゲルにおける第二の自然

石 井 知 章

### は じ め に

K. ウィットフォーゲル (Karl August Wittfogel: 1896–1988) は、かつて一世を風靡したフランクフルト学派の第一世代に属しながらも、後に世界の思想界を大きくリードすることとなる同シュレーの社会学者たちとは異なり、いまだにその評価が定まっていない渦中の人である。『中国の経済と社会』(1931年)、『東洋的専制主義』(1956年)などの著作によって東洋社会の研究に独自の分野を開拓し、かつ中国研究にも大きく寄与した同じ人物が、戦前にはドイツ共産党員として積極的に活動しながらも戦後には亡命先のアメリカでマッカーシズムに対して同調的な姿勢を見せるといったきわめて極端な政治的コミットを経ていることが、彼の評価を二分させている<sup>(1)</sup>。だが、これまで行なわれてきたウィットフォーゲル批判とは、その多くが彼の政治的スタンスを主な焦点にしつつ、内在的な分析抜きで理論的批判へと延長したものにすぎず、けっして正当な学的手続きを経て行なわれたものであったとは言い難い<sup>(2)</sup>。ウィットフォーゲルの理論の中心をなす「アジア的生産様式」と「アジア的専制主義」への批判が繰り広げられた1960–70年代以降、彼の評価そのものも、この二つの理論をめぐる議論とともに、半ば分裂状態で固着したまま今日に至っている。

こうしたウィットフォーゲル批判は、冷戦体制を背景にした二つのイデオロギー的対立を前提にしたものであり、いいかえれば当時の「時代的」コンテキストに少なからず拘束されていたという事実を否定しきれない。しか

し、そうした歴史的的前提条件そのものが消滅してしまった現在、かつてのコンテキストの中で固定されているその虚及び実像を、ウィットフォーゲルその人の理論形成、思想的展開に立ち返って根源的に再検討することはわれわれに与えられた新たな「時代的」要請にもなっているともいえる。したがって本稿では、ウィットフォーゲルのその後の世界観を基礎付けた初期(1920-30年代)の著作、さらにその主著『東洋的専制主義』(1957年)に内在しつつ、彼の自然観と社会観を検討することを主な課題としたい。

そもそも近代的思考とは、ベーコンの人間と自然、デカルトの思惟と存在、カントの認識主体と経験的所与などにみられる人間を主体とし、自然あるいは社会を客体とする二元論として始まった。だが、こうした伝統的思考に対して批判的であったフランクフルト学派には、社民系、コミンテルン系の二つの「正統的」マルクス主義に批判的であるばかりでなく、ルカーチやコルシュらによるヘーゲルに依拠した「主客の絶対的同一性」としての「全体知」にも反対するという共通認識があった<sup>(3)</sup>。ウィットフォーゲルもまた、たとえばルカーチやコルシュらのいう「現実」が「具体的現実」に基づいているというよりも、むしろ純粋な思考への沈潜に基づいたものであることをマルクスの理論への忠実な内在研究を通じて着実に認識していたのである<sup>(4)</sup>。こうした中でウィットフォーゲルは、自然と社会との間に築かれたもう一つの自然の存在に気づき、自然の概念を社会に還元するの でなければ、自然そのものを社会的発展に直接結びつけるのでもなく、むしろ自然の内側に築かれた制度的、文化的側面が社会の発展を一定方向へ向わせるように人間に働きかけるといふ、自然と社会との間の中間項として第二の自然を定式化することで伝統的な二元論を克服していった。しかもこの新たな発見は、マルクスへの忠実な沈潜によって成し遂げられたというのが重要なポイントである。

フランクフルト社会研究所で本格的な研究生活に入った1920年代当初、ウィットフォーゲルはマルクスの意味での「理論と実践」の間の密接な相

互関係を追求するなかで社会科学へアプローチしていき、やがて中国やアジア全般についての数々の実証研究を進める中で M. ウェーバー的な意味での「当為と存在」との緊張関係に基づく社会認識の重要性をも力説するようになっていった。たしかに、アメリカへ亡命し反共的な立場を強めたとされる 50年代以降、この第二の自然という新たな定式化がはじめて打ち出されるようになったのかもしれない。だが、そこへと至るウィットフォーゲルの理論的發展のプロセスには、これまで批判の根拠とされたような「逸脱」や「変節」どころか、むしろ思想的な一貫性さえ見出せるという事実をわれわれは知ることになるであろう。

## 1. 労働と自然

ウィットフォーゲルが断片的ながらもはじめて自然と社会について言及したのは、『ブルジョア社会の科学—マルクス主義的考察』（1922年）においてである。彼によれば、「生活顧慮の目的への自然ならびに社会における体系的定位手段」<sup>(5)</sup>である科学とは、本来「社会的機能」を有しており、生産過程のなかで組織された社会構造としての「歴史的統一態」を形成しているという意味で妥当する。それゆえ、「自然科学の発展は生産関係、すなわち所有関係の歴史的地位によって決定される」<sup>(6)</sup>のである。また『市民社会史』（1924年）でウィットフォーゲルはすでに、ブハーリン『史的唯物論』への内在的研究を通じて自然も社会も現象において一定の規則性たる「合法則性」に従っているが、その解釈としては合目的性を問う「目的論」と目的（「何のために」）に対する原因（「何故」）を問う「因果論」という二つの見方が成り立ち、「目的や合目的性という概念は単純に世界一般に適用されるものでないこと、及び諸現象の合目的性とは目的論的合法則性でないこと」（N. ブハーリン）を理解していた<sup>(7)</sup>。ここで歴史を支配するのが原因か目的かという根源的な問いを最終的に解消するのは、「意志する人間」であり、「人間

の労働」そのものであった<sup>(8)</sup>。ウィットフォーゲルにとっても、「労働する者はただ自然物を変えるに止まらず、同時に自然物の中に自己の意識せる目的を実現する。そしてこの目的は、法則として彼の行為の種類及び様式を決定し、且つ彼は自己の意志をそれに従属せしめねばならぬところのものである」(マルクス『資本論』)<sup>(9)</sup>。

このように、人間の労働はその意志によって媒介されているとはいえ、主体的な自由意志であっても自然や社会の外に立つのではなく、むしろその内側に立つという意味で、原因に従い、諸前提に結合しており、完全に自由であるとはいえなくなる。まさにここでは、歴史における人間の労働のもつ制約されない目的と制約されうる原因という二つの相対する意味が交錯し合うのである。ウィットフォーゲルはここで、「人間は自分自身の歴史をつくる。だが、思う儘にではない。自分で選んだ環境のもとではなくて、すぐ目の前にある、与えられ、持越されてきた環境の下でつくるのである」(マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』)というマルクスの言葉をそのまま引用しつつ、歴史の厳然たる事実によって示されるのが「自然に制約された労働の生産力」<sup>(10)</sup>であり、資本主義的生産様式の分析が自然的背景に基づいているという事実を明らかにした。そもそも自然とは、産業発展史上、とりわけ資本主義の端緒においてもっとも決定的な役割を果たしたのであり、土地の「絶対的豊饒可能性 (absolute Fruchtbarkeit)」でなく、その分化や天然物の多様性こそが労働の社会的分業の自然的根底をなし、労働手段や労働方法の多様性へと駆り立てたのである。ウィットフォーゲルによれば、ここでは自然力を社会的に統制し、節約し、それを人間の労働によって大規模に占有又は馴致するという必要性が産業史上もっとも決定的役割を演じたが、そのことはエジプトやロンバルディアやオランダ、あるいはインドやペルシャ、その他の地域での灌漑工事に典型的に示されているのである<sup>(11)</sup>。

## 2. 地理的唯物論批判

ウィットフォーゲルが政治社会と自然との関連についてまとめた形で、かつ明示的に論じたのは、その論考「風土政治学・地理的唯物論並びにマルクス主義」(1929年)においてである。当時ドイツでは、社会民主主義者グラーフ (Gg.F. Graf) らを中心に「地理的政治論」や「風土政治学」が「土地と文化発展との関係」を軽視したマルクス主義の欠陥を補うという名目で盛んに論じられていた。なかでも、リヒトホーフエン (F. von Richthofen), ラッツェル (F. Ratzel), センブル (E.C. Semple), キェルレン (R. Kjellen) らは、1924年以降ドイツで刊行された「地理政治学雑誌」に集い、自らの綱領的立場を築きつつあったが、それによれば地理政治学とは、(1)政治的諸過程の地的拘束性 (Erdgebundenheit) に関する理論であり、(2)政治的空間と政治地理学に基礎をおき、(3)地理学の対象とする地理的空間の本質が政治的過程を限界付ける、などとするものであった<sup>12)</sup>。つまりリヒトホーフエンらは、政治的生活をその地的拘束性において、地理学的要因への政治的生活の依存性において把握すべきであるというのである。これに対しウィットフォーゲルは、そうした政治過程が土地に制約されるという「不正確」で「非弁証法的な」固定性に基づいた議論が、地理的要素は「直接」政治的生活圏に作用するのではなくただ「媒介」されて作用することを見落としていると厳しく批判した。「これこそ——もしこれより厳密に観るならば——結局のところ如何なる科学的客観性をも有せず、且つ全く異なる政治的意味を有する——古き市民革命家の地理的唯物論の綱領以外の何物でもない。」<sup>13)</sup> たとえばリヒトホーフエンは、「一定の生活形態への衝動は自然的な地理学的関係から自ら発展し来るものであり、後者の影響の下に一定の類型が形成されるのである」という自らのテーゼに基づいて、「乾燥地帯の清澄なる天空が天体の観察をもたらし天文学を生んだ」という結論を導き出して

いるが、ウィットフォーゲルによれば、これは経済的領域の意義をまったく無視している。なぜなら、清澄なる天空そのものでなく、乾燥性による経済的必然としての灌漑、つまり乾燥地域で耕作を可能にするための水を供給する灌漑こそが、四季の正確なる計算を必要としたからである<sup>64)</sup>。またグラフは、「経済的中間項」抜きにして、「気候がすでに国家を全く一定した地理的空間に嵌め込むのであり」、「人口の稠密化と国家の形成とは本来気候の温帯に限られている」<sup>65)</sup>としたが、これらは皆、地理的要因を「直接」政治的要因に結びつけるという、モンテスキューに代表されるいわば「風土」論的な機械的唯物論に他ならない。しかしウィットフォーゲルの見るところ、概して政治的立法形態とは、こうした「抽象的な地理的部分的契機」によってでなく、むしろ「一定の自然的社会的基礎の上に行なわれる生産過程の種類と量」によって規定されるのであり、「具体的分析は、人工的灌漑の可能性を有する、暑く、そして同時に乾燥した地域こそ、多くの人間を養い、大きな国家形成を可能ならしめたことを示している」のである<sup>66)</sup>。

このような「風土(地理)政治学」の基本的な欠陥を乗り越える方法こそ、人間と自然とがあらゆる社会的生産の発展のなかで究極の不可欠根本因子として働く「二つの競演者 (Gegenspiel)」<sup>67)</sup>であるとしたマルクス主義に他ならない。マルクス主義的見解においてはじめて社会生活は、その真実の基礎・物質的生産の仕方にまで還元される。そのようにしてこそ、自然の——人間に対する経済的歴史的意義が問題になる限りでの——本質把握的分析が可能になる。マルクスにおいて自然的契機は、本質的に物質的生産との連関において把握されており、「一定の発展段階が有する物質的生産諸力は、物質的生活の一定生産内に統一され、又実践的に表現されつつ、社会的・政治的・精神的生活過程を条件づける」<sup>68)</sup>。たしかに人間は自己の歴史を創るのだが、それは自己の選んだ状態の下でなく、あくまでも彼に見いだされた一定の客観的状态の下においてのみである。つまりそこには、人間の活動力は動因であり、自然はその実際の構造によってこの活動力に一定の方向を示す

客観的基礎であるという歴史貫通的な基本構造がいつも横たわっているのである<sup>89</sup>。したがって、こうした条件下で変革が可能であるとすれば、それは自然が社会的生産力の増大を許容する場合のみである。それ以外の場合にはむしろ、人間の労働では統御しがたい自然関係が先立ち、自然に制約された生産力、たとえば乾燥地域であれば灌漑農業形態というように、それに見合った政治的生活形態にとどまることの方が常であった。具体的にいえば、エジプトと中国では、集中された水利灌漑の大きな役割がその国土の孤立ゆえに軍国的封建的任務にとって本質的でなく、文官と僧侶からなる官僚をその支配階級とする「相対的には極めて純粋な形態のアジア的専制政治 (asiatischer Despotie)」が生じたのである<sup>90</sup>。

### 3. 生産様式と自然

さらにウィットフォーゲルは、「経済史の自然的基礎」(1932年)において経済史の方法との関連で自然と社会との関係をめぐる理論をさらに精緻化し、より深く、具体的に展開するにいたる。ここでも既述のように、人間と自然とを社会的生産の発展において不可欠な「二つの競演者」ととらえた基本的視座がそのまま活かされ、そのうえに理論的肉付がなされていった。

ウィットフォーゲルによれば、社会的に生産する人々の意志方向を制約しているのは、直接的には人間の生理的性状であり、間接的にはその時々到達した発展段階において変化せしめられた客観的基底である。たとえばゾンバルトは自由意志という仮定から歴史分析を出発させたものの、具体的かつ科学的分析にアプローチする際には、そうしたいわば神学的要請が社会科学の認識にとって妨害となることを自ら認めざるを得なかった。その結果ゾンバルトは、本来自由たるべき意志形成を画一ならしめる要因として、「性格」、「魂と血」、さらには「外的状況」といった「基礎誘因」を想定することで、「野蛮な地理的唯物論に逆戻りしている」<sup>91</sup>のである。われわれはむしろ

ろ、そうしたゾンバルトの轍を踏まないためにも、まずは自然と社会、自然的及び社会的生産諸力を「二つの互いに原則的に異なった機能を果たす」<sup>②)</sup>要因であるとみなすべきであり、さらには労働を行う人間が一方で自然に対する働きかけの契機を担い、自然が他方でその物的な構造如何によってその労働行為を一定方向に導くか導かぬかの契機を担っていることを想起すべきなのである。

ウィットフォークルにおける社会的労働過程の発展とはここでも、その様態、活動にしたがって制約する生産諸力の発展である。この過程において、生産されたものと生産されざりしもの、社会的に条件づけられたものと自然的に条件づけられたものという生産諸力の二つの要因は相互に作用し合う。すなわち一方で、あらゆる自然により条件づけられた生産諸力はただ一定の歴史的な状態の下でのみ活動するという一つの歴史的な性質を有し、他方で社会的生産諸力はすべて、その時々活動的な自然により条件づけられた生産諸力の性質によって制約されるのである。「社会的に労働する人間が、どんな自然により条件づけられた契機に『出会う』か、それを制約するものは、勿論、社会的に発展した生産諸力（労働の技能、科学及びその技術学的適用、労働組織、生産されたる生産手段の範囲及び作用）の全体である。しかし、その社会的形態における労働過程の変化が、如何なる方向に行われ得るか——そして一般に、かかる変化が行われるか否か——これは生産する人間の恣意に由来するのではなくして、社会的にその際『到達し得る』ところの、自然により条件づけられた生産諸力の態様、多様性及び組合せに依存するのである」<sup>③)</sup>。こうして一方の生産様式概念においては、社会的な契機が考慮されるべきであるとはいえ、なによりもそこには社会的に労働する人間の自然に対する関係が前景にある。これに対し他方生産関係概念においては、自然に向けられた労働技術的な側面が同時に考えられているとはいえ、なによりも事物の社会的側面がその前景にある。つまり、前者は制約する側面として機能し、後者は制約される側面として機能しているのであり、そこ



ではまず社会的に労働する人間の自然に対する関係が、次にはじめて人間相互の関係が問題になるのである。

ウィットフォージェルにとってこのように第一次的な重要性を帯びる自然とは、けっして社会と無媒介に存在しつつ二元的にとらえられる抽象の対象などではない。しかもそれは、けっして固定的な所与としてのみではなく、生産関係と生産様式という生産力の織り成す二層のダイナミズムによって生成される新たな対象としてもわれわれの前に立ち現われてくるのである。「産業と社会状態とは、自然的外界を新たに二様に『生産する』。一つは自然の本質的特性の変形によって、次に、その現実化によって。この変化の二つの形式の間には差異があるが、この差異はその形式のしばしば起こる（必然の、ではない！）結合を排除するものではない。自然の変形は生産する人間の労働行為の直接結果である」<sup>40</sup>。より具体的にいえば、例えば耕作用高原、人口灌漑の開拓、水路の築造、耕作地・土地産物の利用などに見られる「自然の変形」は、まさに「労働過程の経過の中に生ずる立脚点の変化の結果」<sup>41</sup>に他ならず、それらが結果的に現実化したときにはすでに、「労働過程において、人間にとって重要な自然的契機が、常に同一であるということは、従って、又、全く問題となり得ない」<sup>42</sup>のである。自然それ自体の悠久なる歴史において、自然は相対的にはんのわずか変化するにすぎないのかもしれないが、対人間関係、とりわけ社会的に労働する人間との関係においてそれは、むしろ最も根本的に変化しうる。しかしながらそれは、さしあたり変化「しうる」というにすぎないのであり、自然の「変形」＝人間の自然に対する働きかけとその「現実化」とが必然的に結びつくわけではけっしてない。というのも、「変形」から「現実化」への転化の過程において、ダイナミズムをもたらす「発展」というもう一つの内的要因が不可欠となってくるからである。

#### 4. 「第二の自然」の発見

ウィットフォージェルは1930年代、ソ連で展開しているマルクス主義の現実を目の当たりにして、主要な生産手段の国有化が政府に対する民主主義的統制と無階級社会の勃興をもたらすかもしれないという希望を失い、棄てていくことになる。さらにソ連社会の性格についての理解の深化は、官僚的専制主義の構造とイデオロギーに対するさらなる洞察への道を切り開いていた。スターリンがナチスと独ソ不可侵条約を結んだ1939年以降、ウィットフォージェルは「正統派マルクシスト」の立場を離れ、アメリカへの亡命を契機として「反共主義」の立場を強めたとされる。この頃彼は、現実としてのマルクス主義に大きく幻滅しつつも、社会認識の方法としてのマルクス主義そのものを捨て去ることなく、むしろその「アジア的」なものの概念へと沈潜する中で「アジア的生产様式」論に出会い、さらにそこに欠如していたウェーバーによるアジア的な「官僚制」を中心とする権力論の重要性を認識するに至ったのである。「東洋的社会に対するマルクス・レーニン主義的見解の再検討は、マルクスが『アジア的』概念を創始したところか、それが古典派経済学者の著作のなかですでに完成していたことを見いだしたにすぎないことを明らかにした。私はさらにマルクスが、古典派の見解を多くの重要な基本点において受け入れていたにもかかわらず、彼自身の理論的立場より不可避であると思われる結論、すなわち、アジア的生产様式の諸条件のもとでは農業管理的官僚制が支配階級を構成するという結論を引き出しそこねていたことに気づいたのである」<sup>69</sup>。かくしてこの時期に、ウィットフォージェルの中で、マルクス（アジア的生产様式）とウェーバー（アジア的官僚制）との方法論的邂逅がなしとげられた。

こうしたウィットフォージェル自身の政治的立場の変化そのものには何ら影響されることなく、自然と社会をめぐる彼の基本的立場は、『東洋的専制主

義』(1957年)においてもかつてのままの形で引き継がれていく。ここでも自然は、人間によって働きかけられる対象であると同時に、それが許容する生産力を媒介に社会を一定方向へと向わせるよう人間に働きかける対象である。同一の制度的条件における人間の自然に対する働きかけは、自然的背景の相違が新しい形態の技術・生活・社会管理の発展を可能にするという意味で、たしかに不断に自然を転形し、新しい生産力を現実化している。そうすることによって、「自然は新しい機能を獲得し、それはまた徐々に新しい外観をとってゆくのである」<sup>88)</sup>。しかしながら、それが果たして新しい水準の活動に達しうるかどうかが、あるいは達したとしてもどこへ導くかといった変革の可能性は、第一には制度的秩序、第二には人間活動の究極的对象、すなわち「人間が獲得しうる物理的、化学的、生物的世界」<sup>89)</sup>のそれぞれに依存している。つまりウィットフォーゲルは、一方で固定的な所与以上の、人間の働きかけによって変形されうる対象として自然を見ると同時に、他方で労働過程の変化が如何なる方向に行われ得るかを決定する客観的基礎としても自然を見ており、ここでも社会に対する自然の第一次性を強調しているのである。ただしここで注意すべきなのは、もはや自然そのものよりも、ある条件下で獲得された制度的、文化的側面の重要性を強調するようになっているという事実であろう。このことは、ウィットフォーゲルがもはやありのままの自然の概念を離れて、人間がそれに働きかけることですでに獲得された文化、さらには「自然の転形」を経ることで初めて人間の獲得しうる対象となった「物理的、化学的、生物的世界」、すなわち作為によって自然そのものの内部に創出された「制度的秩序 (institutional order)」としての第二の自然を問題にしはじめたことを意味しているのである<sup>90)</sup>。

たしかに人間は、ある技術的条件の下で自然そのものに働きかけることによって自らのコントロール下に置くことのできる、第二の自然を獲得できるかもしれない。しかしながらウィットフォーゲルにおいて、いくつかの弾力的な自然的要因は操作したり必要に応じて変化させることが可能であるとし

でも、他のいくつかの自然的要因は依然としてその社会的発展段階における技術的条件の及ばない人間のコントロールの外側にあるがゆえに、恒常的なもの (constants) とみなされた<sup>60)</sup>。具体的に農業との関連で自然の景観についていえば、まず温度と地形は多くの場合顕著な恒常的要素であるし、土地の地形も灌水農業運営との関連で平坦化など多くの小調整は遂行してきたとはいえ、基本的には人間の働きかけを受け入れない。これに対し植物や土壌については、たとえば有用な作物をそれがない地方から移植することもできるし、余り効果的でないとはいえ良質の土壌を貧弱な畑へと運び入れることによって改良することも可能なのである。

## 5. 水力と権力

こうしたなかで、もう一つの自然的必要条件である水は他の自然の景観とは異なり、特殊な性質をもっていることにわれわれは気づく。「水は大部分の作物よりも重たい。にもかかわらず、より便利に制御することができる。固形物の凝集力にさまたげられることなく、重力の法則にしたがって、水は自動的にその環境の近付き得る最も低いところに流れ込む。与えられた農業景観のうちで、水はすぐれた自然的変数 (natural variable) である」<sup>61)</sup>。しかし如何に可変的であるとはいえ、水が欠乏している景観のなかでその巨大な集積を試みようとしたとき人は大きな困難にぶつかった。これに対し、現在の状況と変更後の状況から得られる双方の利益を比較考量した結果十分なメリットがあり、なおかつ自然的かつ技術的条件も許していると見積もられた場合、人はその試みを敢えて行うこととなる。

このように、乾燥していても潜在的に肥沃である土地を恒久的にかつ収益のあるように耕作することを欲したとき、人は水の確実な供給を確保しなければならなくなった。しかしだからといって、その必要性が新たな自然的機会を利用するように一律に強制するわけではけっしてない。むしろ「状況は

開かれており、灌漑農業のコースはいくつかの可能な選択の一つにすぎなかった<sup>93</sup>のである。たしかに、「自然環境が与える全ての課題のなかで、人間に社会管理の水力的方法を発展させるよう刺激したのは、不安定な水の状況が与えた課題である<sup>94</sup>。しかしながら、「降水」という直接的な自然に依存する農業から、「灌水」という自然への働きかけによって人間の獲得した第二の自然に依存する農業に移行することは、全くの「純粹の選択」に属する事柄であるとウィットフォーゲルはいう。というのも、一つには非農耕民集団にとって灌漑農業という選択は、場合によっては近隣の農業国家に対する従属的地位に甘んずることになるかもしれないという限られた魅力しかもたないからであり、もう一つには実際にそれを選択した集団の数は、選択しなかった集団のそれよりも少数であるという事実が、「選択の自由」の存在を如実に物語っているからである。このようにウィットフォーゲルは、かつて自然と社会との関係を論じたときと同様に、水力的社会における第二の自然の相対的第一次性を強調した際にも、自然的条件によって社会のあり方が決定されるという「地理的唯物論」を慎重に退けていたのである<sup>95</sup>。

しかしながら、水力的農業へ転換するにせよそれを拒否するにせよ、そのこと自体は秩序も指導もなしには行われないのであり、すでにしてここから集団的な一つ的意思決定が求められるといえる。もしここで灌漑農業を選択したとすれば、決定をめぐる権力の集中はその水準に応じてさらに二つの道をたどることとなった。すなわち、一つは共同体内的意思決定であり、もう一つは超共同体的意思決定である。たしかに、灌漑農耕が降水農業よりも大量の肉体的努力を要するというのは事実だが、水路を掘ったり、ダムを作ったり、水を分配したりする地方的仕事は、数少ない農民やその家族、近隣の小集団によっても共同体の内部において十分遂行可能であることが予想される。ここでは小規模灌漑に依拠した農耕は、たとえ食料供給を増大させたとしても、そのこと自体は水力農業や東洋的専制主義を伴うわけではけっしてない。これに対して、多くの農民によってすでに様々に小規模灌漑の試みら

れた共同体が相変わらず乾燥状態にあり、しかし潜在的には十分に肥沃であるといった地域において入手可能な水資源が見いだされたとき、人々は共同体の水準を超えてそれを獲得する可能性を追求することとなる。これこそはまさに、自然に対する支配の可能性が社会に対する支配の可能性へと転じ、水力的社会において専制的パターンが生じる瞬間であった。ウィットフォーゲルはこの水の統制と専制権力生成のプロセスを次のように描く。

「灌漑農業が水の大きな供給の効果的な取り扱いに依存しているとすれば、水のもつ独特な性質——その大量に集積する傾向——は制度的に決定的なものになる。大量の水は大量の労働によってのみ水路に流され、また諸境界内に蓄えられることが可能となる。この大量の労働は調整され、規律され、指導されなければならない。かくして、乾燥した低地や平原を征服しようと熱望する多くの農民たちは、機械以前の技術的基礎のもとでは一つの成功のチャンスを提供する組織的な装置に頼ることをよぎなくされる。彼らは仲間たちと一緒に働き、指令する一つの権力に服従しなければならないのである」<sup>66)</sup>。

このように灌漑用水という第二の自然は、それが農民たちにとって死活の条件となるがゆえに彼らを大規模労働に決定的に駆り立てたのであり、これを唯一組織できた専制権力はまさにそのことを背景にしつつ、自然の支配を社会の支配へと転じていったのである。しかしながら、こうした専制的パターンへの条件とは、あくまでも一つの地理・歴史相対的な機会であって、けっして歴史貫通的・決定論的な必然性ではない。なぜ政府の水管理が必ずしも政治の専制的方法を意味するわけではなかったかといえは、「収奪的な自給自足経済の水準を越え、降水農業の強力な中心部のもつ影響力の外に出たところではじめて、また所有権に基づく産業文明の水準に及ばないところではじめて、人間は水不足の景觀に特殊に反応して、特殊な水力的生活秩序

へ歩み寄った」<sup>87</sup>にすぎないからである。

たしかに表面的には、人間はこの灌漑農業社会において水に規制された諸条件に必然的に従っているように見えるかもしれない。しかしながらそれは、ありのままの状態で自然を支配できたかつての水準を新たな生産力が乗り越えた時、人間がそこにより強大な自然を発見したがゆえにこの自然そのものの支配を暫定的に断念しつつ、むしろこれを利用しながら社会の支配へと向い、結果的にその客観的基礎に自ら適応していったというにすぎないのである。つまりここでも既述のように、「変形」から「現実化」への転化の過程で、それに見合った発展という新たな高次の要因が加味されているのである。「いくつかの要因は、現存する技術的条件のもとでは、全ての実際的の目的にとって人間のコントロールが及ばないので、恒常的なものとみなされねばならない。他の要因はより弾力的であり、人間はそれを操作したり、必要ならば、変化させることもできる」<sup>88</sup>。恒常的なものと弾力的なものとはを分岐させるのは、自然そのものではなく、自然の支配をもたらす「技術的条件」であり、その水準を決定する生産力なのである。このように、ウィットフォーゲルの自然—社会論は、あくまでも生産力と生産関係との関係、さらにその発展水準との関係においてとらえられているのであり、そこから導きだされる水力社会論もけっして「超歴史的」に構成されているわけでないことがわかるであろう。

## お わ り に

これまで見てきたように、ウィットフォーゲルは「地理的決定論」とされた立場を慎重に避けつつも、なおかつ自然を相対的第一次条件として東洋的専制主義の基礎構造に影響を及ぼす対象としてとらえていた。すでに明らかのように、ウィットフォーゲルにとって自然とは、人間によって働きかけられる対象であると同時に、それが許容する生産力を媒介に社会を一定方向へ

と向わせるよう人間に働きかける対象であるという両義的存在であった。同一の制度的条件における人間の自然に対する働きかけは、自然的背景の相違が新しい形態の技術・生活・社会管理の発展を可能にするという意味で、たしかに不断に自然を転形し、新しい生産力を現実化している。しかしながら、それが果たして新しい水準の活動に達しうるかどうか、あるいは達したとしてもどこへ導くかといった変革の可能性は、制度的秩序と人間活動の究極の対象に依存しており、ここでも社会に対する自然の第一次性が強調されたのである。ただしここでは、自然そのものよりも、ある条件下で獲得された制度的、文化的側面の重要性が強調されており、人間がそれに働きかけることですでに獲得した制度、さらには「自然の転形」を経たことではじめて人間の獲得しうる対象となった物理的、化学的、生物的世界、すなわち自然と社会との間の中間項としての第二の自然が問題にされたのであった。

かくしてウィットフォージェルは、自然的必要条件の一つである水が、他の自然の景観とは異なり、特殊な性質をもっているという事実に気づくにいった。それは与えられた農業景観のうちで、すぐれて自然的可変量であるがゆえに、巨大な集積、すなわち灌漑という新たな試みを可能にした。乾燥していても潜在的に肥沃な土地を耕作しようとするとき、人は水の確実な供給を確保する可能性を獲得したのである。しかしだからといって、その必要性が新たな自然的機会を利用するように一律に強制したわけではけっしてなく、むしろ灌漑農業のコースはいくつかの可能な選択の一つにすぎなかった。「降水」という直接的な自然に依存する農業から、「灌漑」という自然への働きかけによって獲得された第二の自然に依存する灌漑農業に移行することは、全くの「純粹の選択」に属する事柄であるとされたのである。このようにウィットフォージェルは、かつて自然と社会との関係を生産力を媒介に論じたときと同様に、水力的社会における第二の自然の相対的第一性を強調した際にも「地理的唯物論」を慎重に退けたのである。

さらに、このように灌漑農業が水の大きな供給に依存していることは、そ



の大量に集積する水の傾向が制度的に決定的であることを意味した。大量の水は大量の労働によってのみ水路に流され、また諸境界内に蓄えられることが可能となる。したがって灌漑用水という第二の自然は、専制権力をして大規模労働の組織化へと決定的に駆り立て、自然の支配を社会の支配へと転じていった。たしかに人間は、ある技術的条件の下で自然そのものに働きかけることによって自らのコントロール下に置くことのできる、第二の自然を獲得できるかもしれない。しかしながら、いくつかの弾力的な自然的要因は操作したり必要に応じて変化させることが可能であるとしても、他のいくつかの自然的要因は依然としてその社会的発展段階における技術的条件の及ばない人間のコントロールの外側にあるがゆえに恒常的なものとみなされたのである。だがここでもまた、こうした専制的パターンへの条件とはあくまでも一つの地理・歴史相対的な機会であって、けっして歴史貫通的・決定論的な必然性ではなかった。たしかに表面的に人間は、この灌漑農業社会において水に規制された諸条件に必然的に従っているように見えるかもしれないが、それは単に人間がそこにより強大な自然を発見したがゆえにこの自然そのものの支配を暫定的に中断し、結果的にその客観的基礎に自ら適応していったというだけのことなのである。このことは逆にいえば、一定段階の水準を越えてゆく確固たる所有権に基づいた産業社会が出現したとき、人間がこの自然そのものを支配する可能性さえあることを示唆している<sup>69</sup>。このようにウィットフォークルは、第二の自然を歴史における決定因とすることを避けつつ、自然—社会論を生産力と生産関係とのコンテクスト、さらにその総体的発展に伴って生じる生産様式の変換、その水準との相対関係においてとらえていたのであり、「自然的唯物論」、「機械的唯物論」と同列に扱うことは本来的に不可能なのである。

## 注

- (1) L.A. コーザー『亡命知識人とアメリカ』荒川幾男訳（岩波書店、1988年）、140頁以下参照。
- (2) たとえば、ハンガリーの中国学者フェレンツ・テーケイは、フランスの「ラ・パンセ」が1964年4月、1931年のレニングラード討論以来はじめて国際的にアジア的生産様式の問題を提起した特集号において、『『地理的な』道をたどって、ウィットフォージェルは、ついに、すべてのアジア社会を『水利社会』の名で呼ぶにいたり、あまつさえ、官僚制ないし『全体主義的』条件を自分が認める場合には、ヨーロッパ社会をも、そのように呼ぼうとしている」（本田喜代治編訳『アジア的生産様式の問題』、岩波書店、1967年、9頁）とし、その理論の内在的分析に立ち入らないまま批判している。またフランスのジャン・シェノーもウィットフォージェルを「マルクスの背教者」と呼びつつ、「一つの社会的な生産様式、つまり生産力発展の一定の水準にある生産の要求との関係において成立している社会的諸関係という原則がないのである。アジア的社会は、ウィットフォージェルの筆にかかる、一種の呪術的な公式、『水利社会』というものになってしまう。そして、この公式からして、この著者は、現代の社会主義的世界に対する憎悪に満ちた一つの批判を展開する。あんなものは往年のアジア的専制主義の再来だと、幼稚な地理的決定論をもちだして批判するのである」（前掲『アジア的生産様式の問題』、61頁）と強く非難している。さらにフランスのロジェ・ガロディにいたっては、ウィットフォージェルの『東洋的専制主義』は「粗雑な地理的決定論」に依拠しており、(1)集団所有の基礎のうえには階級社会と専制主義体制が築かれる可能性があった、(2)しかるに社会主義は集団的所有と大公共土木事業のうえに築かれている、(3)したがって社会主義は東洋専制主義およびそれから生ずる搾取の一形態であり国家と官僚が新しい搾取階級を構成するという「単純な三段論法」を出ないうへ、「水利依存社会」という言葉を「馬鹿の一つ覚えのように」持ち出す「無視してもかまわない程度のもの」（ロジェ・ガロディ『現代中国とマルクス主義』野原四郎訳、大修館書店、1970年、19頁）とあからさまに罵倒しているのである。

これらはど極端ではないとはいえ、同じことがやはりわが国で影響力をもつ中国研究者についてもいえる。例えば西嶋定生において、東洋的デスポティズムの概念はモンテスキュー以来のヨーロッパ思想の中ではぐくまれ、ヘーゲルやマルクス、ウェーバーへと受け継がれたうへ、「ウィットフォージェルによる自然的諸条件に基づくアジアの宿命的な体制として措定された」という特殊西欧的なものとして理解されている。だからこそ西嶋によれば、「この概念はヨーロッパにおける近代的自我意識の自覚過程においてその対置概念として設定されたものであり、価値の基準を彼ら自身の世界であるヨーロッパに置くことにより、その価値基準に立脚して自己認識を可能ならしめるための素材である反対概念として設定されたもの」なのである（西嶋定生『中国古代帝国の形成と構造』、東京大学出版会、1961年、49頁）。

たしかにウィットフォージェルは、ことあるごとに西欧近代市民社会に言及しつ

つ、それとの対比における中国の国家、社会の特質を、ウェーバー同様にいわば策出論的 (heuristisch) に描きだすことが多かった。しかしだからといって、そのこと自体は、『東洋の専制主義』の下敷きともなっている『中国の経済と社会』などの著作の執筆のために蓄積されたあの膨大な実証研究でさえも、「ヨーロッパ人自身は喜ばしくもその中に住んでいなかった外部の世界に関する概念」(同上) を形成するための単なる「素材」に過ぎなかったなどということを意味するわけではないであろう。また西嶋が主張するように、仮に西欧的=近代的自我意識がウィットフォージェルに代表される理論的枠組みを「対置概念」として設定したと認めるとしても、そのこと自体は必ずしも理論構築の際の価値基準をヨーロッパだけに置きつつ、外なる中国をヨーロッパの価値基準のみで説明し、「中国史の内部からの発展としては説明できない」ということを意味するわけでもないであろう。いずれにせよわれわれにとって、「その中に自己の現在を規定する歴史条件を探索しなければならないわれわれの問題設定とは遠くかけ離れた発想」(同, 50頁) であるかどうかは、まずはウィットフォージェルの築いた土俵に立ちつつ、そのうえでなされる具体的な行論に即してはじめて論じ得る問題であると思われるのである。

同様に、戦後中国古代史学の旗手的存在である増淵龍夫は、「ウィットフォージェル氏が治水灌漑の国家管理を問題としたのは、東洋的社会の停滞性を、生産力の自然的基礎から説明しようとする『自然的环境決定論』の上に立つものであり、それは、彼の東洋的社会停滞論と不可分に結びつくもの」であるとしたうえで、「治水灌漑の不可欠性とその国家管理が、ウィットフォージェル氏のように、中国における不変の自然的条件にもとづいて一義的に立論されるならば、それは、そのような自然的条件を打破する何等かの契機が提示されない限り、中国古代デスポティズムの人頭支配は、その歴史的な性格を喪失して、いつまでも循環と停滞をつづけねばならない、という矛盾におちいる危険をもっている」と批判する。(増淵龍夫「中国古代デスポティズムの問題史的考察」『歴史学研究』, 第227号, 1959年1月, 34-35頁) たしかに、「アジア的停滞論」の克服を重要課題の一つとした戦後日本の歴史学の立場からすれば、こうした増淵の議論も一つの方法として理解できないわけではない。しかし、だからといって、「彼(ウィットフォージェル引用者)の『東洋的社会』論をもってしては、今日の中国の変革は、中国史の内部からの発展としては、説明できない」と論断しているものであろうか。そもそも、自然一地理的要因の第一次性を強調することによって、あたかも『東洋社会』に崩壊と変革をもたらす契機は、内部的力からではあり得ず、それは外部からの影響によって始めて与えられる」(同, 33頁) とするような議論を、はたしてウィットフォージェル自身がしているものであろうか。彼はむしろ逆に、「停滞を云々することは誤りであろう。この停滞という言葉に伴う宿命論的な響きは全く別としても、いったん形成された生産、および社会体制の内部的成熟は、経済的支那並びに精神的支那をも、かなりの程度に、この長い全期間中、活発な活動(及び発展)の状態に置いたのである」(K. ウィットフォージェル『支那経済史研究』横川次郎訳編, 叢文閣, 1935年, 55-56頁) といい、自然・環境・歴史的決定(宿命)論をはじめから退けていたのではなかったのか。さらなる具体的な検討については本論に委ねるとしても、増淵が

「停滞社会論と不可分にむすびついた彼の中国研究は、中国の変革を希求し、中国史の中に発展と変革の契機をさがし求めようとする実践的要求に燃える人々からは、大きな不満と批判とをもって迎えられねばならなかった」(前掲『歴史学研究』, 32-33頁)と述べる時、われわれはそこにある種の恣意的=政治主義的な背景の存在を感じとらずにはいられないのである。

- (3) 清水多吉『1930年代の光と陰—フランクフルト学派研究』(河出書房新社, 1978年), 31-41, 161頁参照。
- (4) G.L. Ulmen, *The Science and Society: Towards an Understanding of the Life and Work of Karl August Wittfogel*, The Hague: Mouton, 1978, p. 53. 『評伝ウィットフォォーゲル』 亀井兎夢他訳 (新評論, 1995年), 113-4 頁参照。
- (5) Karl August Wittfogel, *Die Wissenschaft der Bürgerlichen Gesellschaft. Eine Marxistische Untersuchung*, Berlin: Dermalik-Verlag, 1922, S. 9. 『ブルジョア社会の科学—マルクス主義的考察』 北村奎之介訳 (叢文閣, 1928年), 8 頁。
- (6) *Ibid.*, S. 21. 同, 30頁。
- (7) Karl August Wittfogel, *Geschichte der Bürgerlichen Gesellschaft*, Wien: Malik-Verlag, 1924, S. 171-72. 『市民社会史』 新島繁訳 (叢文閣, 1936年), 415-7 頁参照。
- (8) *Ibid.*, S. 177. 同427頁。
- (9) *Ibid.*, 同。
- (10) *Ibid.*, S. 183. 同439頁。
- (11) *Ibid.*, 同439-40頁。
- (12) Karl August Wittfogel, *Geopolitik, Geographischer Materialismus und Marxismus, Unter dem Banner des Marxismus*, III. Jahrgang, 1929, S. 21, 『地理学批判』 川西正鑑訳 (有恒社, 1933年), 11-12頁参照。
- (13) *Ibid.*, S. 22. 同14頁。
- (14) *Ibid.*, S. 24. 同19頁。
- (15) *Ibid.*, S. 43. 同67頁。
- (16) *Ibid.*, S. 44. 同68頁。
- (17) *Ibid.*, S. 714. 同213頁。
- (18) *Ibid.*, S. 718. 同223頁。
- (19) *Ibid.*, S. 723. 同232-33頁。
- (20) *Ibid.*, S. 727. 同240頁。
- (21) K.A. ウィットフォォーゲル「経済史の自然的基礎」(『東洋の社会の理論』 平野義太郎訳, 原書房, 1976年所収), 222頁。
- (22) 同224頁。
- (23) 同。
- (24) 同230-231頁。
- (25) 同231頁。
- (26) 同。
- (27) Karl August Wittfogel, *Oriental Despotism: A Comparative Study of Total Power*, (以下 OD と略記) Yale University Press, New Haven, 1957, p. 6. 湯浅越男訳『オ

リエンタル・デスポティズム』(新評論, 1991年), 25頁。

(28) *Ibid.*, p. 12, 前掲『オリエンタル・デスポティズム』, 33頁。

(29) *Ibid.*, p. 11, 同32頁。

(30) この「第二の自然」とは筆者自身の呼称であり、ウィットフォーゲルが『東洋的専制主義』などの中で使っている言葉ではない。たしかに、「風土政治学・地理的唯物論並びにマルクス主義」(1929年)では、「人間の二次的自然」(die sekundäre Natur des Menschen)という言葉で同じような状況に言及されているが、それは単に人間の労働という自然への働きかけによって「変化され」、本来の姿からは「区別された」自然という程度の抽象的意味合いしか持っていなかった。(前掲『地理学批判』, 155-56頁。)しかし、『東洋的専制主義』におけるウィットフォーゲル自身による説明によれば、「制度的秩序」としての第二の自然という定式化は、「制度的」ならびに「文化的」要因の第一次の重要性を強調している点で、前掲論文や「経済史的自然的諸基礎」(前掲『東洋的社会理論』所収)で自然そのものの第一次性が強調された時とはもはや質的に異なっている。まさにそのことを前提にして、「歴史的に開かれた状況における純粋の選択をする人間の自由に関する認識が導かれることになるのである」。たしかにこうした彼の思想的变化は、「以前受け入れていたマルクスの若干の思想に対する私の批判にとって重要である」かもしれない。しかしだからといって、そこから彼の思想の抜本的な変更が派生してくるというわけではなく、ウィットフォーゲルは「これらの訂正を除いて私はなお初期の見解の重要な点を保持し続けている」と自ら付け加えている。(OD., p. 11, 前掲『オリエンタル・デスポティズム』43頁参照。)

(31) E. バラーシュも、「停滞」という言葉の代わりに「恒常」という価値中立的な表現で中国社会をとらえている。彼は、ウィットフォーゲルの水力社会論を「官人によって遂行される多くの諸機能の中から、唯一つだけ、すなわち水利建設に関する機能だけを選びだす」と批判しつつも、その官人国家の「全体主義的」側面の評価については、「中国の国家は管理者の国家、干渉者の国家であった。(中略)交易も、採掘も、建築も、儀式も、学校も、事実上公共生活の全体と、私生活の大部分とは、ともに国家の規格化と編成の下にあった」とし、ウィットフォーゲルと同じ立場をとった。そのうえでバラーシュは、「帝制下の諸制度の永続性や、特定の事象、たとえば儒教主義の恒常性を否定することもできない。それは次々に変貌はしながらも、しかもずっとつづいてきた」とし、官人国家がたとえ「停滞的」でなくても、「恒常的」であることに何ら変わりはないと主張したのである。(E. バラーシュ『中国文明と官僚制』村松祐次訳、みすず書房、1971年、10頁以下参照。)

なお、個人的な交友関係を含むウィットフォーゲルとバラーシュとの思想的距離関係については、前掲 *The Science of Society: Towards an Understanding of the Life and Work of Karl August Wittfogel*, 1978, p. 410を参照。

(32) OD., p. 15, 前掲『オリエンタル・デスポティズム』, 36-37頁。

(33) *Ibid.*, p. 16, 同38頁。

(34) *Ibid.*, p. 13, 同34頁。

(35) たとえば『東洋的専制主義』がマルクス主義的「経済決定論」に依拠していると

する A. トインビーの批判に対して、ウィットフォーゲルは次のように反批判している。「頑固な経済的決定論をとるところか、私は経済的なものの生態学的 (ecological) 要因への依存を、さらに開かれた歴史的状況において様々な選択を提供する文化的諸条件への後者の依存を示したのである。偶然性、イエス、決定論、ノー。それが私の立場である」。(K.A. Wittfogel, "Reply to Arnold Toynbee," *The American Political Science Review*, Vol. 52, No. 2, June 1958.) この発言はまた、ウィットフォーゲルにおいて制度や文化という第二の自然が、自然そのものの内側で重層的にとらえられていることを示唆している点でも重要であろう。

③⑥ OD., p. 18, 同40頁。

③⑦ *Ibid.*, p. 12, 同34頁。

③⑧ *Ibid.*, p. 13, 同35頁。

③⑨ 但し、人間が社会的発展によって自然の支配をもたらしうる論理的可能性とは、コルシュやルカーチのような「主体的能動性 (voluntarism)」に傾いた一つの解釈であって、けっしてウィットフォーゲル自身がそのように明示的に語っているわけではない。M. ベイシンによれば、こうしたワイマール期における自然と社会との関係の「漠然とした (vague)」定式化こそが、ウィットフォーゲルをはじめとする地理政治学との関連で自然と社会との関係を論じた「正しい解釈による (correct)」マルクシストの特徴であるとともに、「マルクス主義的学説のもつ本来的な多元主義 (pluralism)」を示唆するものであった。そのことはまた、自然と社会との関係を再考するうえでの「生態学的」意味をも有しており、環境と社会という今日的なコンテキストでマルクス主義の再評価が可能であることを示している。(Mark Bas-sin, *Nature, Geopolitics and Marxism: ecological contestations in Weimar Germany*, WWW: Royal Geographical Society, 1996.) なお、ウィットフォーゲルと生態史観との関係については、上山春平「歴史観の模索」(『上山春平著作集』, 第二巻: 「歴史の方法」, 法蔵館, 1996年所収) を参照。

(いしい・ともあき 商学部専任講師)